

外国語活動教科論

外国語活動部

1 教科等の本質

平成 29 年度告示の学習指導要領の中で、外国語活動の目標は、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、話すことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。」としている。外国語活動の目標の中心となる部分は、「コミュニケーションを図る素地となる資質・能力」を育成することであり、児童がこれまでに慣れ親しんできた外国語を駆使しながら、様々な相手と互いの考えや気持ちを伝え合い、コミュニケーションを図ることの楽しさを実際に体験することが重要となる。

研究全体論にもあるように、エージェンシーを発揮しながら外国語活動に取り組むには、児童が目標に向かって外国語を使ったコミュニケーションを行い、異文化や他者を理解していく姿が見られるだろう。このように、自分の目標や課題を設定し、達成に向けて試行錯誤しながら学ぶ姿がエージェンシーを発揮する児童の姿と考える。

外国語におけるコミュニケーションは、Canale(1983)によると、コミュニケーション能力を以下の 4 つの要素から構成されている能力であるという考え方が広く受け入れられている。①文法的能力（文や文章を作り出す能力）②談話能力（文レベルではなく文章の構成に関わる能力）③方略的能力（語彙力などの不足等を補ってコミュニケーションを続けていく能力）である。④社会言語学的能力（発話の適切さを判断できる能力）Savignon(1983)は、「コミュニケーション能力は相互作用的で動的である」と述べており、学習が進むにつれて 4 つの能力の比重や相互関係が変化していくと捉えられる。清水（2018）は、Savignon の逆ピラミッド型コミュニケーション能力のモデルを松川・大城（2008）の日本の外国語教育に当てはめてモデルを基に、図 1 のように示している。小学校外国語活動においては、特に方略的能力を育てていくことが重要であると考えられる。外国語に触れる初段階の中学年の児童に限られた語彙や表現で方略的能力の必要性を自ら考え、方略的能力を自分のものにしていくことがエージェンシーの発揮場面と考えられる。そのようなことから、外国語の基盤を育む小学校段階では、外国語活動の教科の本質を「外国語（英語）を通じて、多様な文化や価値観を知り、他者とよりよくコミュニケーションをとること」とした。これらの教科の本質を踏まえた外国語活動になるために、身につけさせたい児童自ら考える方略的能力（コミュニケーションの工夫）を以下のように示す。

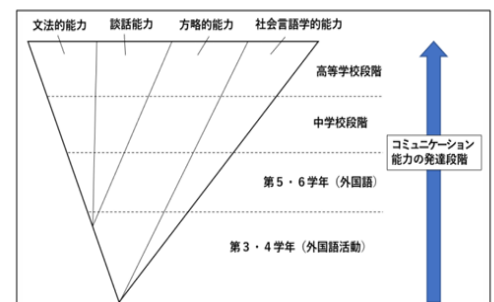


図 1 コミュニケーション能力の動的モデル

ジェスチャー （身振り・手振りや指さし）	どのような状況・場面で、どのようにジェスチャーや指差し等をすれば、相手に伝わるか
リアクション	どのような状況・場面で、どのようなリアクションやコメントをすればよいか
聞き返しや繰り返し	どのような状況・場面で聞き返したり、繰り返したりしたらよいか

児童自らこれらの方略的能力である伝え方や聞き方の手法・手段を考えながら、コミュニケーションをとることと本校の研究主題である「well-being につながる学び」と関わりが深い学習設定が「目的・状況・場面」を捉えたコミュニケーションの設定である。狩野（2017）は、「意味のある、伝える必然性のあるコミュニケーションの場面を設定し、その中でもっとしっかり伝えたいという児童の欲求が高まったところで、伝え合うための手立て

が必要」と述べており、自ら方略的能力を考え、活用し他者に外国語を使って、伝え合うことで、「well-being につながる学び」につながると考えられる。以上のことから、「どのようにすれば相手とよりよいコミュニケーションをとることができるか？」という課題を設定する。児童は、伝え方や聞き方を工夫し、エージェンシーを発揮しながら、よりよく解決・表現する方法を探究するだろう。その過程で、子どもは自他の文化への理解を深め、他者とのつながりを実感し、「よりよい未来」を創る基盤である力が育まれると考えた。

2 外国語活動での四つの学習活動

外国語科では、四つの活動を整理したものが以下の表である。

ためし	○相手とよりよいコミュニケーションを図るために実践する時間 ・既習表現や学習活動での気づきを意識して実際に活動する。 ・工夫したい方略的能力を使ってやり取りをする。
みがき	○課題解決のために、既習表現や方略的能力を身に付ける時間 ・身に付ける必要があるものについて準備や練習をする。
さぐり	○本質的な課題に対して、解決の方法を探り、自分の考えをもつ時間 ・モデルをもとに、方略的能力（コミュニケーションの工夫）を考える。 ・目的や状況、場面などから、やりとりに必要な表現を考える。
つなぎ	○それぞれの学習活動での気づきを共有し、協働的に学ぶ時間 ・気づきや分かったこと等を共有する。【中間評価（共有）】 ・選択した学習活動を考え、次時の流れの決定や新たな課題につなげる。

児童は、「どのようにすれば相手とよりよいコミュニケーションをとることができるか？」という本質的な課題を、コミュニケーションの工夫に着目して捉え、解決のために四つの学習活動を選択していく。教師からの本質的な課題⇒単元を貫く課題から、児童は自ら課題を発見し、自分の問いをもつ。「さぐり」では、自分の問いの解決のために、コミュニケーションの工夫について考え、解決の方法を考え、学習計画を立てる。その問いに対して、単元の中で、課題の解決のために「ためし」で実践してみる。「みがき」やその他の学びで身に付けた英語表現やコミュニケーションの工夫を試して実践する。「つなぎ」では、集団での振り返りとして、学びの成果や課題、改善方法等について考え、次の課題の設定につなげたり、次時の流れを決めたりする活動となる。これらの四つの学習活動は、単元全体を通して児童が考えた学習計画や実際に各活動を実践してみて必要に応じた流れの中で柔軟に選択し、決定していく。そうすることで、「どのようにすれば相手とよりよいコミュニケーションをとることができるか？」という課題に向かって、学習に向かっていくだろう。

3 引用・参考文献

- ・文部科学省(2017)「中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語編」
- ・Canale、M.（1983）.From communicative competence to communicative language pedagogy. In:Richards J、Schmidt R（Eds.）、Language and Communication. Longman、2-27.
- ・Savignon、S.J.1983 Communicative competence:Theory and Classroom Practice. Texts and Contexts in Second Language Learning. Addison-Wesley Publishing Company. p.46
- ・清水遥（2018）「関連領域から見る初等外国語教育」ミネルヴァ書房
- ・大城賢「小学校外国語活動（仮称）の方向性～『教育 課程部会の審議のまとめ』を読み解く～」琉球大学、2008 年
- ・狩野晶子（2017）『新学習指導要領の展開 外国語活動編』明治図書